しいたけが出荷されるまで

石づきの先を切り取る

菌床を一日水に浸ける

大きさやかさの開き具合を見ながら収穫

大きさと形を見て仕分けしパッキング

自動管理システムでハウス内の温度と湿度を管理。スマホでデータをチェックできる

2023年9月の法改正で菌床の産地表示が義務付けられ、私たちのような小規模な生産者が国産菌床を入手するのは極めて難しい状況でした。さらに、初年度は菌床を一気に入荷して一気に収穫することになり、まだ販路がなくて山のように廃棄ロスが出てしまいました。それでも、しいたけ栽培を実現できたのは、知り合いや友人が力を貸してくれたおかげです。感謝しています」

理想の栽培環境とていねいな手作業

しいたけ栽培ハウスは、手前に選別やパッキングの作業スペースがあり、仕切りの奥が栽培スペースとなっています。まず、栽培スペースを見学させてもらいました。棚にずらりと1800個の菌床が並び、1カ月ごとに600個ずつ新しいものに入れ替えます。

「しいたけ栽培のポイントは、温度と湿度です。自動管理システムを整備し、空調設備により温度を15～20度、自動潅水設備により湿度を80～100％に保っています。また、ハウス内に設置したセンサーのデータは、スマホで常時チェックすることができます」と話す飯田さん。収穫量などもすべてデータ化し、今後の栽培計画に役立てていくそうです。

ここでの作業は、まず入荷した菌床を袋から出してよく洗い、毎日水かけをします。芽が出たら間引きを行ない、約2週間で収穫します。収穫を終えた菌床は、少し休ませてから一日水に浸け、また芽が出るのを待って収穫。3回収穫したら入れ替えます。利用者さんたちは、これら一連の菌床の管理を手伝っています。密集したものを適度に間引きするときや、食べ頃に育ったものを収穫するときは、丁寧な手作業が欠かせません。

さて、収穫したしいたけは作業スペースに運ばれ、利用者さんたちが選別とパッキングを行ないます。石づきの先を少し切り取り、汚れや変色がないかチェックしながら、大きさと形を見て4ランクに仕分けします。次に、かさがきれいに並ぶように丁寧に袋に入れ、シーラーで封をして出来上がりです。

「利用者さんたちに分かりやすいよう、作業の手順やポイントを写真に撮って壁に貼りました。衛生面に気をつけて、食べる人や買う人の気持ちになって作業をしてもらっています」

工夫を重ねた新しい取り組み

神栖しいたけ園では、新しい取り組みも進めています。その一つが、きくらげ栽培です。「夏場はしいたけの育ちが悪いので栽培を減らして、その代わりにきくらげを導入しました。気温25～30度が育ちやすいので、夏向きなんです。風のふく太郎の姪（めい）っ子という設定で〝風のふく代〟と名付けました。これからもファミリーが増えていくかもしれません(笑)」

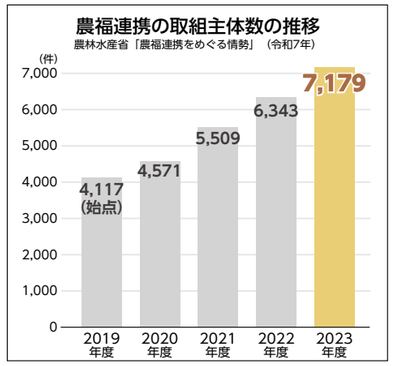
きくらげ

また、廃棄ロスを減らすため、乾燥しいたけをはじめとした加工品の開発にも力を入れています。収穫したうち形が悪いもの、小さいもの、かさが開ききったものなどは、パウダーに加工して販売しています。

いまの課題は、間引きしたしいたけの活用です。1回の間引きで約50キロも集まりますが、商品化や販路の開拓が難しいとのこと。「見た目はしめじのようで、味と香りは立派にしいたけ。そのかわいらしい形を生かして、切らずにそのまま炊き込みご飯やパスタに入れたり、アヒージョにしたり、メニュー提案をしようと考えています。今年は、佃煮を瓶詰めにして販売するつもりです」と佐藤さん。これからもいろいろなアイデアが飛び出しそうです。

丁寧な手作業が欠かせない

1つの菌床で3回収穫できる



農業と福祉は相性がいい！

農福連携で作業をしている利用者さんたちの様子を見て、どのようなことを感じたのか二本柳さんと佐藤さんに聞いてみました。

「しいたけが成長する過程を間近に見ることで、育てる責任感や達成感が生まれているように思います。家に帰って〝今日はこういう作業をしてきたよ〟と話してくれて、すごくうれしいという親御さんの声も聞いています。それから、キチクロの利用者さんがコンパスの利用者さんに質問をするという、これまでにない自発的な行動が見られた人もいます」と話す二本柳さん。初めての農作業で、新しい気づきがたくさんあるようです。

手前が間引きしたしいたけ

それに対し佐藤さんも、「他の施設の利用者さんと一緒に農作業をするのは初めてですが、キチクロの皆さんはあいさつをきちんとされるので、コンパスに通う自分たちもそうしたいと刺激を受けたようです。作業の合間に交流することも、とても大切だと感じました」と話してくれました。

飯田さんは、農福連携への期待を次のように語ります。「農業に限らず、どの分野でも人手不足に悩んでいる中、社会全体でどのように労働力を確保し、農福連携を進めていくかが今後の一番の課題になると思います。農福連携を進めるうえで、大変なこともありますが、私も、もっと工夫できないか、福祉事業者の皆さんと共有できることがあるのではないか、何か一緒に新しいことができないか、常に模索しています。うちに見学に来る農業法人さんもたくさんいますので、ぜひ一歩踏み出してほしいですね」

農福連携を通して、神栖市にまた新しい風が吹いています。

3/21(金) 午後7時～8時30分
保健・福祉会館
農業を通じた就労支援に関する勉強会
申・問市社会福祉協議会
TEL0299-93-0294